



春霞燦々五

放
203
5

203
5



也

春隻秋冬春篇卷之五

伊勢茂

東都

振鷺亭主人

著

13
於
く
介

本
夷

第十齣

標峰檢校綽趣して劇場成説
艶之依奇出て江湖上を玩

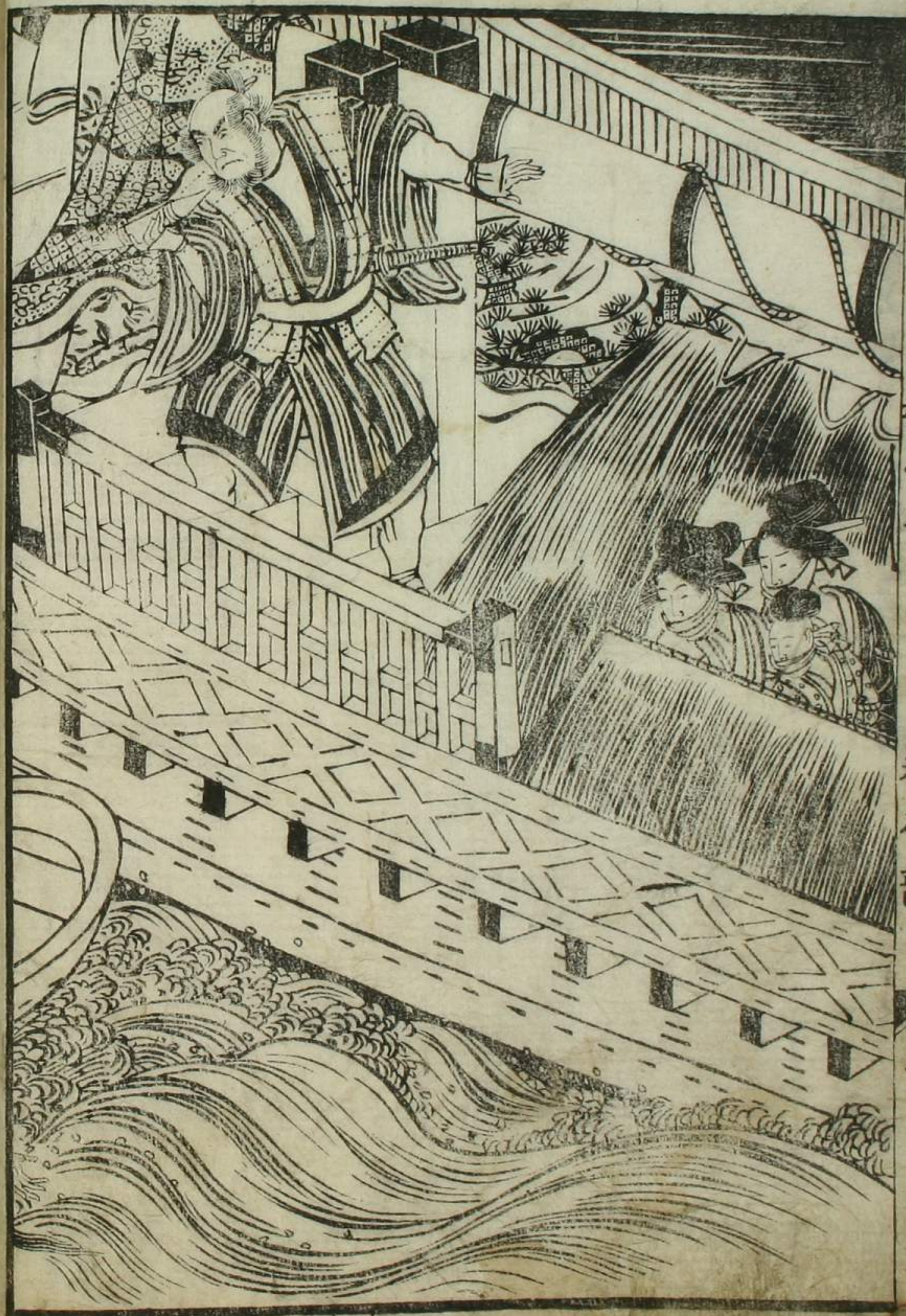
公きん福ふく舟ふね道みちの海うみ上の上小こ漕そう出でとの夜よ三さん里り成な舩ふねて洋やう中ちゆうの海うみに翌あした日ひ又また早はや
天あま小こ那な風かぜ吹ふけ舟ふねを走はせある共とも日ひ黄わう昏こんに及およびて大だい回かいの浪なみ小こ着つけあて
弦しづるる五ご彼かの舟ふね六む陸りく小ことていづるる白しろきさのさ路ぢに唯ただ舟ふね底そこ小こ依よ着つて
十じゅう里り小こと来きてて方かたを日ひきまを我われ身みいづるるまかく漂ひら泊たくてあるる庭にわに至いたり
又またをやいづる辛からき目めもや遭あいひたるる軍いくさとて只ただ顧かへ嘆なげきあはれぬ
急いそ小こ許もと多た乃の人ひと来きりて路ぢに成な一いつ頂ていの轎こし子こを擲なげせ途みち道みち小こ出でるるあはれぬ

一掃美々敷土庫遠の大慶高堂より出て即ち轎子を去園又昇すも
新る処より許きの養婢を出敷く路に轎子の内より持して初極
奥より付ひかき世路にいつるももちぎて舟路に碎てや人心
地もろくお例も息も張きたじら養婢急な醒薬服用して中も灌
溺々小甦醒せさぬく小舟より路に此妙業次服すると心と忽神
訥よりて天明さぞぐけ首を眼次完て四下次有の徳てこ家富大ひ
豊なる光景も應々の第宅と違へる廳の方に方小教本の根柢を聴いて光
恰も白晝のどろろ時中又素袍小鳥帽子引てさる一個の官人出来
路に杖を能く上の方小坐成儀で殷勤小礼を以てさるの吾子怪
後よりさるまが某が面々看識ありや否と問小路にさる人か
も世世官人の面々さるさるにさるち大ひ小孩て向てさるの二箇

世身老女小若めらと親に在るに急難救ひ給ひ方小をばらさ
彼官人咳てさるもさる某その時捕頭秋三といひいさる實は
秋野彌三郎伊三といふ者なり又揚子船を製造る世へ元來我が
船の舟士小て吾子成世處小敷まいせんなるにぞやとや心易まは
ちと相列小田原はて澤田艶之依が第宅あり只今その明白とせ
中さんとてた右小論じて正面は韓紙戸成さると同せさる世路に微
眼次用て窺ひさる中中央小相貌堂々たる一個の美まな御供して
着坐はぬとの粧束厳小美麗なり座の傍小又一一個の儉拙童子
裁き道服を被る方が整正として併居る路にさるも火走乃下
在てつとくと那人の面々看る小正小と親に依るに一般の
般の喜びて只大ひ小呆たしてさるは依り成ぬく路に小向

去るいふ其の前日の夜に始と相違はるやたこと不審なるも信
 その後故成悦く詳小國せ申さんとて去る年二月巳の日は
 まん相別江寫小おわて其にせよ吾子又相見より互に等閑か
 志成運びか世つとも尚吾子が真の心を計らんが爲ること
 金澤ふりて百塚公小奉仕はるの我がかむる愛まきまを彭さん
 があるに我身より百折千磨の艱難ともいそ危窮小逼り存立
 臨てといさう列女の節又推し車一と馬と鑿定て我が悦は後さ
 所ありと頼り小憐嘆はるる路に元来孝義の才なる由に世討大ひ小
 悟りて忽ち夢の骨なる心地とてさるふても君のまこと朝夷奈の故通
 おわて絨の爲ふらせせ持ひるが今日の對面さらば不審ふたるなりと
 去小籠に依微笑く去るのその時其血吐く死しとてはしるの事

汁は口ふ合て其を吐吾子又敷きたるのとて我と金沢と逃去
 一と乃始あり今日乃對面ある迄吾子と怖とて車ハすくこと林中
 の空裏めてその膽を切あるひ心又櫻をを負姫いふと看脱んが爲
 各くと勾當て如出一出戯をばはつるやいよく件をを語あしてを修拙
 成せ申さんといまごも了るふ彼角能男女川滝と助ゆるぎ出て
 路にがふ踏踏て去るハ其金沢小おわて好て相見はる世相ありさ
 元より其件の信よりて途中吳妻の備して始後身の後身小附隠
 中よりハ志に直にまづ今日の吉辰万歳なるも中なる路にをよめて
 滝と助小同て去るハたある附ハ身金沢と我と成救せんして去る
 りあはじがいははたまふを男女川咲て去今大平の時節其力ありそ
 争々櫻小人成誤申さんや只今明白をさせまいらはばとて意と拍



春集秋夕

卷之五

春之部

ちるち忽ち二個の人かきる白路の道にさるる小人物突撥滑稽の言
 口を齎して去るハ秋の前小張三李にとめて合はふいふ所谷の敏
 小入るる皂隸とある由さるハの敏が心易く落しまいせんがなる其附の
 耳鼻鳥珠ハるる何の送物とて着官の耳目が驚はるる通同なり
 今日ハ秋と全く瑕なき玉の好男子とぞやと呷々とお笑ふ原とさ
 二人ハ俳優のお譯して此の説話小及て各々大い小真が體に取付不
 彼檢校路の小向て去るハ某今日ハ是實の標峰檢校あるいさ見
 すは猶もや前日容を變て朝妻奈の切通小いさ某又異人の辨
 扮て内身が孩迄の山乃後頂八十賢臺といふ洒落ありささ
 以願字を借て戲廂の假具を用て宮殿樓閣彩と耀きたる
 光景をばて内身の塊が奪ひ臆が冷し不思彼の秋勢とて

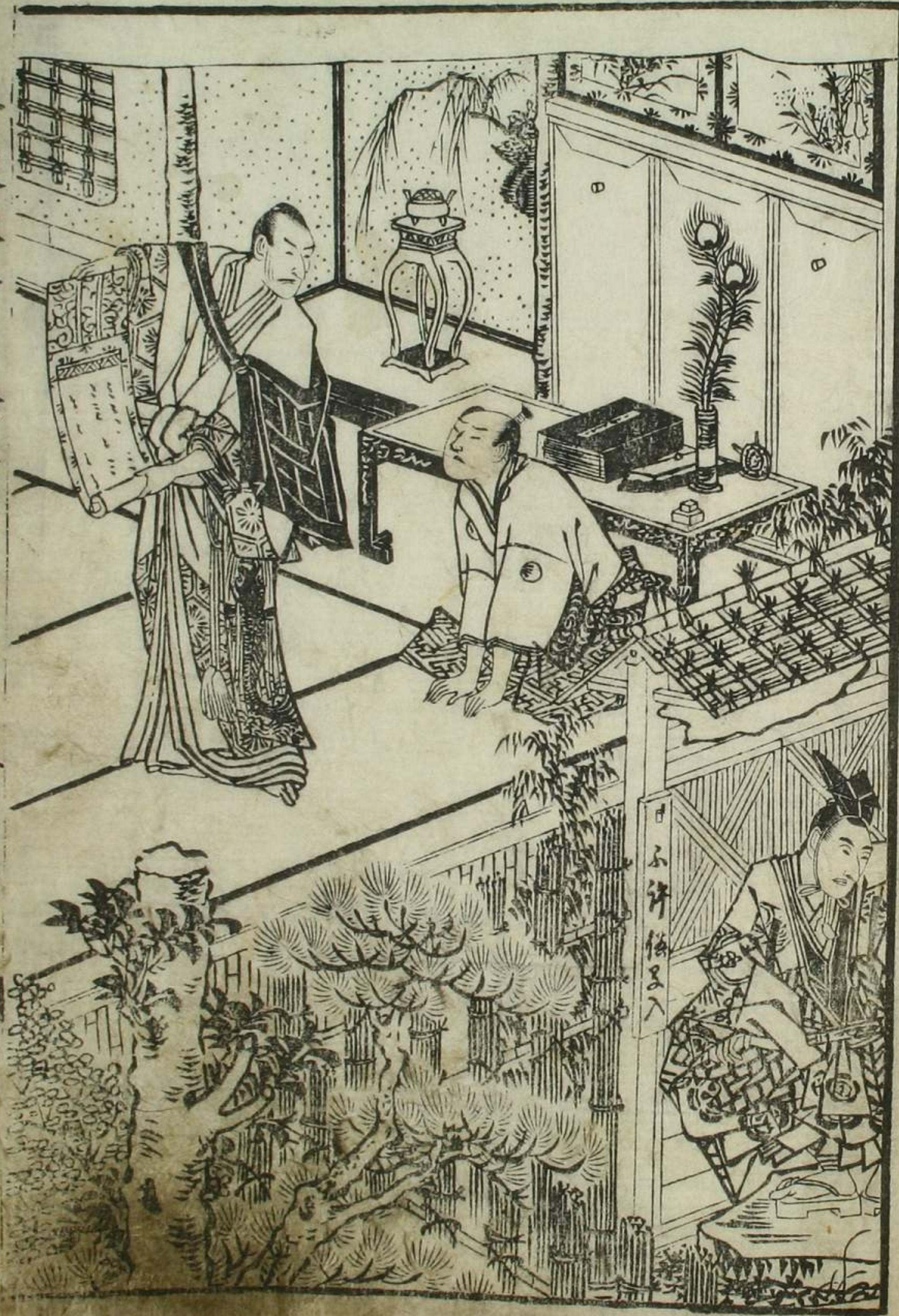
せしりへ深山夜陰の事ありや実小異人などの空屋よと別くと思ふ
 怕しやみ猶も理りたるその時乃婦が驚かるるこし梨園の小且は雇ひ
 か母の或ハ雷雨鳴動のこもるるはるる是歌吹其室の鳴物と用て内身
 の心が初し忽ち竹葉小推令中が飛せ由比濱の砌小ち奔りけりハ
 以身のさるる雲小捲揚とて大路の隊主とてさる心地して夢幻の夢と十
 方成其の猶も徳とてハ是眼が掩ふ計あり果ては芽及の内小身を投
 下はひがそ夜に怖しきさのいさるるなんいさや二途河原を合は
 院これくと招きさる小於て二人の者出さるる白路にハこいさるる者々と
 是る小の一箇家乃内とてはとをのともありさるるいさると大い小發く
 彼焼ハ又路の小舎に於て甚ど恥り家及なり怒り依は兼情を看て
 喉てさるるハ母老女の某が小童亡月の傳母とて由比濱の渠が在廻るる吾子

が心成身入んた是某他處にて事を托し、
 或好新人我迎ゆる者と云く扱ふ件くだんの戯劇きぎくをいふ世よなる集あつの
 突しつの老女らうにょもよくぞ三途さんずの岐まじりの女にょ成なりらるはくも仕つか課かをさす
 小彼こが老女らうにょの面おもては行ゆを流ながしてなるはそのおまらうくちとせまの世よ
 小籾こま倉くらの海うみを渡わたる蛇へび與ともしりのおて近年しんねん與とも市いちも出でてこの
 喰たでもううからざるものなまどもとの附つきこそ拙つたくやおがつんとも
 只ただ顧かへり其その夜よの無な礼れい我われ託たくは路みちにもそ乃すなは附つの怖おそろろつらうの角つのを生お出い
 牙きばをも負お負お夜よ又またのどく小ことひはなるが今いま日ひを小こ最さい如に法ぽうの老女らうにょは
 つらくと面おもてを看みる小彼こが老女らうにょも又また面おもて成なり者もの合あせて互たがひよ是こゝど笑わらをかせる
 又また彼か法ぽう院いん侍しやうより進すす出でてなるは某たがひと又一いつこ個この丑うしとりのまかる老女らうにょと
 通と同どう合あして某たがひが頭かぶ鬚ひげ害がい傷やうなる成なり者もの小こ權けんは修しゆ驗けん者ものといふつ実まことの

嵐あらし音おん好こうと申まを減へ医いるの以も来こ顧かへり面おもての湯ゆにとどけぬ路みちにハ件くだんの情なさけ由よしと
 一いつつて奇き異いの思おもひ成なりる小こと又また崎さき峰みね路みちに小こ向むかへるは某たがひと春はる
 以ものよに成なりて花はなの煤すす杓しやくを憑たよりまの世よとりの以も来こ乃すなは来こ應おこみぬ
 拘か拘か小こ做しひる某たがひが方かたすの他たがひ意いを犯とがして彼か朝あさ妻つま奈な切き通との存ぞん亡ぶつ
 および十じゆ段だん見み臺たいは猛まう傷やうあるひ由よし比ひ波なみの呵あ噴げん小こかろくお世よと心こゝろ
 挽ひ探たん我われ負お負お糸いとをいじて荒あ唐たう淫いん佚えきの束たば成なりぬ賢けん女にょを隠かくまひ
 せらるは深ふかく某たがひが罪つみなりといふ小こ又また伊い三さんが去ささぬいと某たがひと又また由よし比ひ波なみ
 乃すなは權けん師しとる權けん師しを行ゆる姑あはれく戯あそぶ似にたりとも真まこと小こ負お負お成なり
 試して信しん友ゆう小こ與よ某たがひ保たも正ただとして今いま般はん州しゆう婚こん儀ぎをさすむすむすんおと
 院いん小ことる所ところなる嗔あ呼い人の妻つまとる者ものかきこを解とれと只ただ顧かへり感かん
 賞しょうとる束たば斜しゃとる久ひさくも一いつ奇き小こ若わ喜きくといつ坐ま中ちゆうとる色いろさ

奴らと叱りしは家僕の忠告にて坐を洗てけりしが良以て門外大ひ小
開く呪る勢ありて又別一人の家僕慌忙しく走りて怒り依り苦て云る
彼普化僧大ひ小怒り我を去るべし小打圍尚吼り狂て門外を踏む
怒り依り成算て大ひ小怒り自己小出て言成候を奉れりて於く
門前小屋を是をひとつの普化僧身の長六尺計とあるんを以て身軀堂
々として威風凛々なり彼普化僧之音多小叱りて云るは你都て人を識る
匹夫等其或誰とかおれ我は是日本無双の名士なり等閑の輩と一列小
入るる又是怒り依り取勢成りて大ひ小怒り進んで彼普化僧小
對して云るは門外今某に對面せんともあるは法謝を求んが爲るんも家人
等すても布施成候なり別あるは是所小何故其三門前を踏む
ちや彼普化僧吟々と大ひ小咳てのや某は是米沙修行乃なる小

素び只和殿の名を慕ひて訪来り方々這信の匹まども某を怪えて
罵り一耐れ怒り乗じて門外を闹ちり怒り依り門外本某と識
認め是も彼普化僧が云只との高名をばせその面を識らば怒り依り
怒り依り某が奉るる門外何處の言ありや彼普化僧は是成候て忙く礼を
はて云さて主人某が云今の無礼を説くま怒り依りまづ門内へ入れよ
引進す此耐彼普化僧は天蓋成裁る儘中怒り依り揖せぬ大踏歩一
洋々として玄園中を通りか州下室候より小宣うべ別も僻靜なる所
あはれ俤ひし儀をんやといふ怒り依り是を以て又引進て茶室の内より中
宣主の坐定りて勅に佳茗の款待をすも是とも彼普化僧は是天蓋を
脱じて云るは某今日始ての面謁小天蓋を脱するは無礼小候と
いとも是は是我林九論の法則よりば等怪りあるるなり是某が和殿小



同中(い)のあり貴家(きけ)は艶依(えんい)とふ人(ひと)あらずや艶之依(えんのい)は是(こゝ)に於(お)いて大(おほ)く強(こゝろ)て
 云々(い)の坊(ぼく)何(なに)を以(も)て能(あた)はぬ成(なり)知(し)るもや普化(ふけ)僧(そう)が(い)ふ某(ある)胡(こ)乱(らん)も推(お)察(さつ)致(し)
 一(い)れい(い)れ和(わ)敷(し)の心(こゝろ)中(ちゆう)に(い)や各(おの)各(おの)怨(うら)み依(い)唯(ただ)唯(ただ)と答(こた)へる(い)普(ふ)化(け)僧(そう)又(また)云(い)ふ
 此人(こゝろ)多(おほ)く武(ぶ)臣(しん)金(かね)澤(ざい)小(こ)多(おほ)く(い)て學校(がくこう)小(こ)奉(ほう)仕(し)は(い)るが其(その)は(い)ち宋(そう)子(し)より
 金(かね)庸(よう)て(い)字(じ)察(さつ)第(だい)一(いつ)乃(すなは)ち主(しゆ)管(くわん)と(い)ふ(い)字(じ)士(し)の寵(ちゆう)也(や)他(た)小(こ)矣(や)り(い)路(ろ)に(い)と
 いふ美人(びじん)を擇(えら)びて主人(しゆじん)婚(こん)姻(いん)をむ(む)ま(い)は(い)延(えん)小(こ)共(こ)夜(や)い(い)は(い)て(い)夫婦(ふうふ)情(じやう)共(こ)に
 倉(くら)澤(ざい)を投(な)げ奪(うば)は(い)る(い)を後(のち)小(こ)房(ぼう)中(ちゆう)に(い)る(い)而(しか)も表(ひょう)伏(ふく)恙(や)ぬ(い)ね(い)紀(き)に(い)遣(は)り(い)置(お)き
 卅(さん)丈(じやう)婦(ふ)の者(もの)え(い)る(い)此(こゝ)の愆(あやまち)と(い)は(い)して何(なに)故(ゆゑ)に(い)ら(い)る(い)か(い)を(い)は(い)し(い)と
 曉(さと)ら(い)し(い)これ(こゝ)ら(い)其(その)事(こと)を(い)察(さつ)訪(ぼう)小(こ)い(い)ま(い)し(い)と(い)の(い)人(ひと)も(い)為(な)合(あ)は(い)ふ(い)人(ひと)界(かゝ)り(い)の
 風(ふう)聲(せい)成(なり)知(し)る(い)も(い)や(い)れ(い)る(い)怨(うら)み依(い)唯(ただ)唯(ただ)と(い)ふ(い)長(なが)く(い)普(ふ)化(け)僧(そう)世(よ)不(ふ)明(めい)不(ふ)白(はく)
 答(こた)へ(い)て(い)今(いま)推(お)し(い)て(い)云(い)ふ(い)某(ある)昨(きのう)日(にち)欄(らん)行(ぎやう)橋(はし)の書(か)肆(し)呉(ご)趨(そ)坊(ぼく)の店(みせ)に

一個(ひと)の秀(う)去(き)坐(ざ)て書(か)成(なり)觀(くわん)る(い)其(その)貌(さう)を(い)る(い)小(こ)艶(えん)依(い)が(い)尚(なほ)刑(けい)に(い)活(くわ)像(ざう)の(い)良(りやう)
 又(また)多(おほ)く(い)前(まへ)頃(ころ)合(あ)は(い)小(こ)佐(さ)判(はん)と(い)ふ(い)事(こと)を(い)變(か)へ(い)て(い)其(その)さ(い)を(い)成(なり)然(しか)し(い)は(い)整(せい)齊(せい)る(い)一(いつ)表(ひょう)乃(すなは)ち
 貴(き)人(ひと)か(い)ら(い)某(ある)尚(なほ)詳(しょう)小(こ)と(い)ふ(い)事(こと)を(い)あ(い)て(い)其(その)人(ひと)の(い)後(のち)小(こ)隨(ずい)ひ(い)て(い)来(き)り(い)一(いつ)平(へい)家(け)
 門(かど)内(うち)小(こ)入(い)ぬ(い)其(その)人(ひと)分(ぶん)明(めい)小(こ)懸(けん)依(い)と(い)ふ(い)事(こと)を(い)又(また)其(その)人(ひと)乃(すなは)ち刑(けい)容(よう)願(げん)和(わ)殿(てん)の(い)摸(もく)様(ざう)を
 似(に)たり(い)又(また)卅(さん)丈(じやう)怨(うら)み依(い)を(い)る(い)が(い)卅(さん)丈(じやう)支(し)奈(な)何(なに)と(い)ふ(い)事(こと)を(い)同(どう)諾(だく)ら(い)る(い)怨(うら)み依(い)又(また)唯(ただ)唯(ただ)と(い)ふ(い)事(こと)を(い)り
 答(こた)へ(い)て(い)云(い)ふ(い)坐(ざ)を(い)死(し)と(い)ふ(い)事(こと)を(い)入(い)り(い)ぬ(い)事(こと)を(い)か(い)は(い)る(い)又(また)頃(ころ)あ(い)て(い)一(ひと)人(ひと)の
 家(け)僕(べ)来(き)り(い)て(い)中(ちゆう)に(い)る(い)人(ひと)の(い)坊(ぼく)を(い)後(のち)堂(だう)小(こ)請(せい)ま(い)し(い)と(い)ふ(い)事(こと)を(い)す(い)は(い)し(い)と(い)ふ(い)事(こと)を(い)進(しん)む
 星(せい)之(し)普(ふ)化(け)僧(そう)の(い)坊(ぼく)も(い)粹(すい)ず(い)尚(なほ)と(い)ふ(い)事(こと)を(い)天(てん)蓋(がい)成(なり)裁(さい)法(ぽう)と(い)ふ(い)事(こと)を(い)進(しん)む(い)て(い)其(その)坊(ぼく)の(い)僧(そう)
 小(こ)多(おほ)く(い)依(い)て(い)後(のち)堂(だう)小(こ)至(し)り(い)る(い)事(こと)を(い)六(む)燭(じやく)火(か)燈(てん)と(い)ふ(い)事(こと)を(い)席(せき)中(ちゆう)席(せき)外(がい)を(い)懸(けん)登(とう)る(い)事(こと)を(い)
 亦(また)此(こゝ)に(い)禮(らい)腹(ふく)小(こ)草(そう)て(い)優(ゆう)小(こ)坐(ざ)居(い)る(い)事(こと)を(い)脚(あし)ち(い)普(ふ)化(け)僧(そう)を(い)進(しん)めて(い)壁(かべ)間(ま)乃(すなは)ち
 上(かみ)坐(ざ)小(こ)禮(らい)わ(い)が(い)許(あ)ま(い)の(い)家(け)人(ひと)右(みぎ)左(ひだり)小(こ)侍(ざむらい)り(い)て(い)奔(ほん)走(そう)る(い)事(こと)を(い)後(のち)又(また)進(しん)む(い)て(い)其(その)坊(ぼく)

春集秘考 卷之五

春之部

九

まづ一執きに色は冷はとそ態懇小勸めておいくは肉孫膝在は玉と
 克志を脱小酒も救巡ぬ及る普化僧慈と依小向てとやうとやほすか
 過ればは遠くを救て疾く某が胸中の疑を解志とささよ此附懸
 てもいつて思をそりるは坊まらまらる壁間の詩を讀て其意を情
 なまそんやゆる時其が稟復詩中小自今明はて其疑を所を決
 終はとて即ち意に猶必棄志ぬるは普化僧はこまを受て坐を起
 壁間の若く進を編笠の裏よりつらつら看るは八句の詩あり後下をゆ
 一編て忽ち慈く依小向てさすはこは彼慈依が合次の言枝は書遣
 への侍能はて又同をさる某は今此詩の意を解得くはして謔を精
 はは首聯ふい擬向金龜岫裏遊とこまの確りてのるあはるん

行踪端為可人留とハ中途人よ留とてとまら東成いふるん
 第二聯の願隨紅拂同高路敢向朱家惜下流とこまを
 屈し投靠するのね契てすて小逃るの意もて第三聯は好事已
 成誰索笑屈身今在尚含羞といひは兩句小あきかみの未聯の
 主人若問真名姓只在艶佑兩字閣といふは乃閣の字こま
 解むらくとの訓はつひ慈依の兩字が閣とさハ中ハ一字を加へ
 加ゆる文字名小おわて之の字此外あるはさしてこそ此艶依の名ハ權の
 願裏はて真の名はこれ艶之依といふるん某はこま武洲合の他人
 探原七良たま百後力る不念依の偏見ありと愛漂々と妻ふ喚て
 伴の天蓋を脱法か満面は咲か念て意業揚白こ此附懸と依との
 面成るるよの急まらるとして未坐小起た里即ち孫伏とハ中あると

今日いづる吉日みて舊主小誦一奉るや却て夢うと疑れぬとて只顧首
 次俯向ける亦ふ忽ち一個の新娘繡袂兜頭を披白霞の小袖引粧て
 出来りしが驚き依り傍り跪く忙き百縁を向て礼をなま百縁を言て
 いふ事じや路に當面小得せせよとある小籠を依りて我答て屏件乃
 繡袂兜頭を科るるこ是即ち路にまで只顧羞慚小堪てさらけ面を
 撞さける驚き依り又百縁を向て僅で申るハ我を主婦のをも乃做親の
 りハそと公の容許たま所よりとも亡命の飛礼小おおて缺る車
 ぬまハ此一舉某が心中甚ぞ穩るは終るハ賢者我を憐れ持り
 たまそんや百縁を愛て去此一舉情癡に似れども衣飾を封還
 て一物も取所なくこ是礼義の人ありまこ名士の志或枉さるハやハち
 風流の君子あり某今日あたらため路に乾答とたうふこび終猶乃

礼を終じむり連師一聯の詩向小感して券契を破り押出しく
 崔却又悔類るん歎喜くくとて只顧猶美はるまハ驚き依り主婦ハ
 又又感謝よこを礼を返して再び杯盤をあたらため海宴後しハ
 百縁中の真小縁にて尚東の詳るが叩ていよく向ふそや驚き依り
 准て色に及を首より尾小まで一を流分るまハ百縁微細を穿て斜
 るるが疑は日且小兒おま不欺しりとして書を撫て大ひ小笑さける此附
 一伴の各々席よ小はらりりてみ又笑つはの舎小てそ何の事り儲百縁小ハ
 此夜歡次盡し遂小羽言日合は小啼り後漸ま人小伴の情由を一々
 語さるにま一人一般ハ驚き一般ハ喜て甚ぞ風流の事とすま一人をさ
 路にををせとるる優るるまハおわて約千金用て装束を具儀
 式を整齊して帽儼の者小田東小いり驚き依りち一族諸役を

招きて會親は成僧く御食意招く小善隨美以盡せり是より西家
親戚とありて往來没をされど人こける成傳て古を吞耳成發して新
話柄といはけり爾來絶え依益善行を修路に又家東以よく新
家道日小隆小ありいまだ幾不どりて一男二女成りも子孫繁術なりて
ま故大の功名をまもま高弟々遠攻の説信小成ゆ

第十卷

盤井唐士原野廟に奇縁成結ぶ

高麗四郎花水橋小兒集を物と

却説弘治永祿の年間の事我國の刺し六邦小秘盜蜂乃とく
紀野野伏山賊等網を張て往來成懼一藤岩を初よりひととを
すく東海乃も物心の時節あり茲小大儀と平塚の居小洵孤花
水橋の事も成唐士原との事也此處の松原小流乃の傳る聖殿あり

此森林の裡小強盜等七八人埋伏松葉成火小禁て横居りぬ時と
驟雨さかき分血を流るが如く儀成浪洶とじて物すさば志く斬日射人
脚を張て只指小蟻の声のそとにぬれ小遙の向ふ路を急ぎて喚り
来る者有り只一人小一の僕子赤條々小竹枝の尖り杖匣を挿け
是成引さけて脱し強盜等が面前をばつて小成等とつくと丸圍
よく買路銭與ふと責むる小彼僕子所々と大ひ小咲てえらるはかく目指
を知らぬ暗き夜小成等乃を差塞ハ必成你等ハ衣裳剥んぬるを
あゝん奇怪なる奴系る其比而に強盜ありと成て好んで夜中往來を
なすの事是なるや你等我をこし人と思ふ事なま小成等といふ你在
蓋し字を吐きて一命惜らんたやや酔を與ふや彼僕子又些も
を成まけてえらるは你等思ふごとく某白雨小過てかく赤條々となりた



葎頂水十甲並并露王如來

春集秋夕 卷之五

春集秋夕 卷之五



春集秋夕 卷之五

春集秋夕 卷之五

犢鼻褌と叫状匣のまゝの今身も小一物となく賜ふべき衣裳もなれば
何の恥心もあらんとて天を仰ぐ歎笑ふ小祓給大不思や你一物となれば其
膽を腹を腹ととも敢ず一把の利刀まらりと拵て振舞ひ出づれば
日と叫て一堆とらる體は慄たてまらるに你等かゝるも鹿忽とまらるは我と
おと柔も勘合の脚のまらるに後目をおとせば犢鼻褌の許さんや此思ひとい
取とぞとえ儘よ件の状匣を小祓給小投し犢鼻褌以て入ると喚てはく
花が如く逃去らる強盜等此光景を見て只呆する中の一箇の老賊ありて
件の状匣を拾ひあげ蓋を發て中をえり小只一點の藥ありては彼奴
急病人の脚のまらる詮を問を貰ねとて衆皆咄とち笑ぬ此時高麗の
三更の鐘響きては嵐お号む松の音溝小集く蛙の姿のまらるのよて
一むら雨乃さゆくおざりみ花水揚の上お怪まきまをこのおら日まらるのよて

白きお表衣出て腰より下へあかく女乃姿あるその御滞として臥て此方へ進ま
光景なり一箇の小祓給をえて怖怖してまらるに你等彼石の橋乃とを見えよ
まじく幽霊こそあらわれう又一箇乃小祓給をえりまらるるもあはれ彼石の橋
溝の畔乃おろ小灌頂水ありあさぬ石女など乃亡矣今此行へ迷ひきたる
うらふ又一箇の小祓給をえり你等強盜を活計を計りて亡矣とさ小おらま
かどるこそ来給なり一定変化れとのありやとの心態をいへる也とを言ひ
衆皆大いに心を改てまらるに幽霊を生捕やとてまらるを引て給はるは
不ぞふ課て一箇の女課しつるまらる小同進もあてりて正小先その
指をさき女指の身小は志るまらる小のまらるは一極をせては縁を
夜あはれ小吹くまらるの光景小て就小強盜等が面筋をたれんとまらるを
むらくと馳参りて捉柱てまらる小まらる天下無雙の美人小は強盜等

互小目と目を見合せ相相ひ彼老賊ハ衆小賊と彼女房ハ衆小賊ハ言成
 和らきて去るハ女房也も怖るるも我々ハ顔おしとて明を
 者も又ハ極て追剥多引等の指小食せんさらく強決の夜ハ
 心易且その所縁乃方送送りまいらせんが何也魚夜は一人ハ下ハ
 指ひ一と宥也随て申す小彼女房雙眼ハ涙をうかして去るハ吾儕ハ
 ふき仔細のたゞしてむと小彼女房ハ出た後ハ逐人の知るとの事少刻
 を此小控後志に疾く路を遁なるといふもさる所小忽ち吊灯の
 光見とく計多の人衆をなま強盜等こゝ見えてきてこゝ逐人のとの事少
 我々よき小謀ひ申さんそ忙々彼女房を投て傍多野立の向身
 我々せ外ハ圖を引とて又何案もきていふとて出て居る処ハ一處の人衆
 るも小棍を拿て跑来り多忙く向て去るハ一個の女ハ去る事多
 強盜等口を齧く参ていふこゝ小一の脚力通すのこゝとて去て女ハこゝ
 かり逐人の人衆こゝ見えて候り合るハとて東の方落りきりるんさ
 り回せとて又この路ハ急なるといふ小賊等いふは事者どもかひとて吐
 るるが又の女房ハいじて悲び出るといふと咽あふ小又老賊がいふは我々の女房
 我々も小飛甲の素綾の衣裳を被うとて花婿の衣服多條のまきて
 昔院の初聲をこゝとバ科る小女房今宵一壁て法誓を志るが如く
 志のび成ぬるとありて碓き誓を思ひ居房より脱出するその花婿
 我々もこゝにありとて小賊等こゝ見えて候り合るハとて去て女ハこゝ
 天乃與る寶ち我々の女房を今宵の事とて生業の端を握ん
 いふも老賊がいふは最愉快といふも我々こゝに於て五十ハありとて
 我小予てなしく早業ハ協に仕るといふ我々速かるといふ餘等恨なき

強盜等口を齧く参ていふこゝ小一の脚力通すのこゝとて去て女ハこゝ
 かり逐人の人衆こゝ見えて候り合るハとて東の方落りきりるんさ
 り回せとて又この路ハ急なるといふ小賊等いふは事者どもかひとて吐
 るるが又の女房ハいじて悲び出るといふと咽あふ小又老賊がいふは我々の女房
 我々も小飛甲の素綾の衣裳を被うとて花婿の衣服多條のまきて
 昔院の初聲をこゝとバ科る小女房今宵一壁て法誓を志るが如く
 志のび成ぬるとありて碓き誓を思ひ居房より脱出するその花婿
 我々もこゝにありとて小賊等こゝ見えて候り合るハとて去て女ハこゝ
 天乃與る寶ち我々の女房を今宵の事とて生業の端を握ん
 いふも老賊がいふは最愉快といふも我々こゝに於て五十ハありとて
 我小予てなしく早業ハ協に仕るといふ我々速かるといふ餘等恨なき



首小志ろき幅巾を被身てぬひこころき衣こころ安太やすたのぬい白しろ引ひ切きたの小
 腕うでふりの女をんな鴈かり次つぎ抱かか悠ゆる悠ゆる然ぜんとお扮はな変へん小こ遠人とほ面おもてを裏うらる幅巾たてををらつて
 刀やいばの血ちを押お拭ぬひぬと白眼めくらの時ときを雨あめ止や雲うみ寄よて月つき高たか麗れいさふさと
 と出でがかの女をんな鴈かりの面おもて映うつして宛あやうも磨みが出でせるかどくろの共とも光ひかり洞ほら微こ嬌せう終はつ
 と佳麗けいれいほほこ遠人とほ志こころきつた人ひと湯ゆさうの女をんな鴈かりへへ怖おそきまに遠人とほの
 面おもてをを小こ妹い妹い肌はだのの比ひ貌まう逞ていくまここ一いつ個この好よ男き子こほほく満み面めん虚そ花け
 池いけ小こ媚めいを合あいで側わき向むぬ遠人とほ又また只ただ顧かへその面おもてを打うちあちてありかとも又
 妄まが小こ言ことををかかるるる做なささせぬの女をんな鴈かりも又また只ただ顧かへその面おもてを打うちあちて
 見みかとも又また忘わすれれに志こころをを做なささりぬ附つ小こ遠人とほ何なにもひんひんの女をんな鴈かりのの比ひ小
 挿さるる櫛くしを把とて月つき明ありり小こ玲れい璃りしてしてこをを鳥とりと香かほほりりが忽たちちちなな小こやん
 ちち熱あつ又また刀やいばを把とて鞆たもとを收あむむの女をんな鴈かりの前まへははおおきぬの女をんな鴈かりも又また熱あつ

於やてて俣くの刀やいばを把とて押おしし青あ色いろはは只ただ深ふかくく老お景かげのの附つはは遠人とほ喜よろこの色いろ於おこ
 ああつつととててここ此こ櫛くしはは遠人とほ形かたち小こ丁てい子し車くるまの描ま金かねははここままかかんん心こころ志こころく
 我わが躰た禮れいの証あかししてして給たまへへるるぬぬのの身みははここ盤ばん井いとといいととるる也や彼あ女をんな鴈かりを
 忽たちちち熱あつしてしてるるぬぬのの身みははここ盤ばん井いとといいととるる也や彼あ女をんな鴈かりを
 若わくくのの福ふくややままいいととるるぬぬのの身みははここ盤ばん井いとといいととるる也や彼あ女をんな鴈かりを
 おおままととるる也やとと西さいのの齋さい小こ孩こてて互たが小こ面めんを向むかせ相あ共ともよよるるをを摺すりくく奇き偶ぐ乃
 對面たいめん以もよろこここびび値あぬぬ處ところ小この老らう絨じゆるる負おひひるる也や死しししがが忽たちちち熱あつしてしてるるぬぬのの身みははここ盤ばん井いとといいととるる也や彼あ女をんな鴈かりを
 小こららみみつつ雨あめをを抜ぬ討うちふふととららんんどど靴くつははかかの老らう絨じゆるる右みぎのの履はきもも直ただにに
 靴くつああままらら直ただにに暫しば附つりりままよよととははししがが脚あし附つりり別べつしてして西さい股こととののわわららぬ

春笈秋冬 春篇卷之五 畢矣

口票

上梓書肆某謹シテ

四方海内好事者官告奉ル這箇春篇ニ專ラ路江艶之佐ガ
傳ヲ述テ事已ニ盡タルガ如シトイハ凡然ラズ件ノ夫妻孝貞ノ行狀往々
未ニ見ヘタリ豈偶然タルニラス亦卷末ニ盤井高麗四郎ニ相遇ノ事
別ニ附會セルニラスコレ隻篇ノ楔子ニ情由イカニトイフ續編ニ至テ
分別ス庶着的人一部ヲ攬テ作ノ臧否ヲ鑒定スルヲタテ零子戯ニ至迄
佑畢而後夜衣殿ヲナスヘシ尚來齣逐テ可嗣出関附ヲ獻スト云

○春篇五冊

發行

此篇ハ畧艶異篇ニ類ストイハ亦佳人才子傳ニメ夫妻タルモ、明鑑

東都

振鷺亭主人 著

一陽齋豊國 畫

文化三歴丙寅孟春刻成

大阪心齋橋筋南久宝寺町

勝尾屋六兵衛

書肆

江都江戸橋四日市

石渡利助

